

家庭における居場所感が思春期の子どもに与える影響 —自己肯定感と友人に対する「甘え」との関係に注目して—

小野田瑠璃¹⁾・吉岡和子²⁾

〔要旨〕

本研究では、家庭における居場所感が思春期の子どもに与える影響について、自己肯定感及び友人に対する「甘え」との関係に注目して検討した。ここでの居場所は、思春期・青年期の子どもにとって「いつでも帰ることができる心のよりどころとなる場所」とし、家庭の中で感じられる「本来感」、「被受容感」、「安心感」といった心理的居場所感だけでなく、家庭の外で感じられる「いつでも帰れる感覚」を居場所感として考慮し、「いつでも帰れる感覚」に関する項目を作成した。福岡県内の中学生、高校生を対象に調査を行い、自己肯定感及び友人に対する「甘え」の得点を独立変数として、家庭における居場所感得点（いつでも帰れる感覚、心理的居場所感）それぞれについて対応のない1要因分散分析を行った結果、自己肯定感及び友人に対する「甘え」の得点の高さによって、家庭における居場所感の程度に差が見られ、家庭における居場所感は、思春期の子どもの自己肯定感や友人に対する「甘え」に影響を与えることが示唆された。

キーワード：思春期 居場所 自己肯定感 友人関係

問題と目的

現在、様々なストレスや問題を抱えた子どもたちにとって、安心できる、ありのままの自分を受け容れてもらえる「居場所」があるということが重要とされており、子どもたちの「居場所づくり」の重要性が様々な場面で指摘されている。とくに、思春期・青年期は、心理的離乳や自我同一性の確立という発達課題に直面する子どもから大人への移行期であることから、その時期の子どもは、とても不安定な心理状態にある。これまでの「居場所」に関する研究で、このような不安定な時期に子どもの「居場所」を保証することの必要性が強調されてきた（青木,1996; 佐治・岡村・加藤・八巻,1995; 富永・北山,2001）。

「居場所」に関する各々の研究においては、「居場所」に関する定義は多義かつ曖昧であり、確立された明瞭な定義が提唱されていないというのが現状である（則定,2008）。「居場所」という言葉の本来の意味は、人がいる場所という物理的な意味であるが、先行研究や関連書籍の中では、文部省の「児童生徒が存在感を実感することができ、精神的に安心していることのできる場所」（田中,1992）という定義にもあるように、「安心して身を置くことのできる場所」（上野,1992）、「自己存在感が得られる場所」（坂本,1993）という心理的

な意味が含まれているものが多い。このように、「居場所」という言葉は、今や物理的な場所のみを指し示すにとどまらず、その場における人のあり方や感覚などを含む概念として、物理的側面と心理的側面の両方を合わせ持つものと理解されている（中村,1998a; 1998b, 1999; 中島,2003）。則定（2008）は、「居場所」の中でもその心理的な側面に着目し、物理的居場所の有無とは区別して考えることを明示するため、「心理的居場所」という言葉を用い、心理的居場所があるという感覚の事を「心理的居場所感」と定義した。また、心理的居場所感とは、安心感や安全感、個体の存在価値に関する感情を有しているとしている。

青年期における「居場所」の意義について、村瀬・重松・平田・高堂・青山・小林・伊藤（2000）は、通所型中間施設に通う、居場所を見失ってしまった思春期・青年期の人々への統合的アプローチを通して、青年の居場所感覚はありのままの存在を受け容れられることを基盤として育つとし、「居場所」を思春期・青年期の人々の治療・成長促進的な要因として位置づけた。また、富永・北山（2003）は、家庭場面、友人場面、クラス場面での安心感、受容的環境、連帯感、役割を調査した研究で、家庭や友人関係が時期に応じて様々な「居場所」となり青年期を支えていると考察した。このよ

¹⁾ 福岡県立大学大学院人間社会学研究科 心理臨床専攻 修士課程1年

²⁾ 福岡県立大学大学院人間社会学研究科 心理臨床専攻 准教授

うに、思春期・青年期の不安定な子どもたちにとって、「居場所」があることは心理的な安定につながるものである。

中でも、家庭における「居場所」は、子どもにとって重要な意味を持つと考える。杉本・庄司(2006)は、「家族のいる居場所」が様々な機能を備えた安定した「居場所」であることを明らかにし、児童期には「家族のいる居場所」を持てることによって心理的安定の基礎となると考えた。さらに、思春期を迎えた子どもは、親からの精神的な自立に伴い、1つですべてを満たしてくれる安定した「家族のいる居場所」から離れ、それに代わる「居場所」を求めるようになっていくとしている。しかし、佐治・岡村・加藤・八巻(1995)は、思春期・青年期の心理的離乳にあたり、いつでも戻って来られる心理的基地が必要であるとし、この時期に子どもが親に対して心を閉ざすことがあっても、庇護してもらえる自分の居場所としての家庭を心の中に必要としていることを指摘している。同様に、富永・北山(2003)によっても、心理的離乳に伴い、家庭、家族における「居場所」が危機的な状態になったとしても、家庭は重要な「居場所」であり続けることが指摘されている。このように、思春期の子どもは、親から自立したい気持ちと依存したい気持ちの葛藤を抱き、親や大人に対して反抗的な態度をとることもしばしばあるが、自分探しや友人関係に疲れた時に、安心して休める場所を必要としている。それが、家庭である。したがって、家庭が思春期の子どもにとって帰りたい時に帰ることができる安全な「居場所」としての役割を果たすことにより、子どもはより安定した心理状態を持つことができると考える。ここでの「居場所」は、被受容感や安心感を重要な要素とするため「心理的居場所」とし、思春期・青年期の子どもにとって「いつでも帰ることができる心のよりどころとなる場所」として考える。そして、則定(2008)が定義した「心理的居場所感」を用いて、「家庭に居場所がある感覚」を家庭における居場所感とする。家庭が「居場所」として感じられるためには、「ほっとする」「ありのままの自分を受け容れてもらえる」などの感覚が重要となると考えるため、本研究での居場所感とは、家庭の中で感じる安心感、本来感、被受容感、さらに家庭を思い浮かべた時に感じる安心感を有しているものとする。そこで、本研究では、家庭における居場所感が思春期の子どもに与える影響を調べる。

まず、家庭に「居場所」があり、より安定した心理状態にある子どもは、自己肯定感が高いと考える。自己肯定感とは、「欠点や短所も含めてありのままの自分を受け容れる感覚」である。栗谷・本間(2009)は、自己肯定感とは自己充実感・自己実現・自己受容感からなる考え、家族とのコミュニケーションが子どもの自己肯定感の下支えとなることを明らかにした。また、瑞慶覧・村田(2009)は、「居場所」の有無は、自己受容感の高さと関連し、子どもが安心して活動できる場が、子どもにとって居場所的存在および自己を受け容れる要因として影響力を持つとしている。

したがって、家庭において、ありのままの自分を受け容れてもらう経験によって得られた居場所感が、子どもの自己肯定感を高めると考える。平石(1990a)は自己意識に存在する健康-不健康、対他者-対自己という2つの軸から青年期の心理学的健康を分析し、自己意識に関する4つの尺度(健康-対他者・健康-対自己・不健康-対他者・不健康-対自己)を提出した。さらに後続の研究(平石,1990b)で、自己意識の発達を自己肯定性次元と自己安定性次元の2点から注目して検討し、自己肯定性次元を明らかにするため、上記の4尺度に用いられた項目を再解析し、自己肯定意識尺度を作成した。この自己肯定意識尺度は、対自己領域と対他者領域に大きく二分され、それぞれが3つの下位成分から成立している。対自己領域の下位成分は「自己受容」「自己表現的態度」「充実感」、対他者領域の下位成分は「自己閉鎖性・人間不信」「自己表明・対人積極性」「被評価意識・対人緊張」である。本研究ではこの尺度を用いて自己肯定感を測定する。

また、家庭に「居場所」があることは、子どもの対人関係にも良い影響を与えると考える。例えば、家庭に「居場所」があり、より安定した心理状態にある子どもは、自己だけでなく、他者に対する信頼感や、受容感が高く、より親密な友人関係を築くことができると考える。そこで、本研究では、他者受容や受容欲求の点から対人関係を調べるために、「甘え」に注目する。「甘え」は、「人間関係において相手の好意をあてにして振る舞うこと」と定義されており(土居,2001)、他者への信頼や、他者受容が必要とされる行為であると考えられる。玉瀬・相原(2004)は「甘え」を多面的に捉え、「甘え希求」と「甘え受容」の下位因子から成る「相互依存的甘え」と「甘え歪曲」と「甘え拒絶」から成る「屈折した甘え」の2種類の「甘え」を区別した。研究により、「相互依存的甘え」がより好ましい甘えであることが示されている(玉瀬・相原,2004;2005,玉瀬・今村,2006;玉瀬・岩室,2004;玉瀬・脇本,2003)。さらに、玉瀬・富平(2007)は、「甘え」と良好な友人関係との関係を調べた。その結果、「相互依存的甘え」が良好な友人関係の形成に重要な役割を果たしていることを明らかにした。一方、「屈折した甘え」は「良好な友人関係」の構築には役立たず、阻害する要因となることが示唆された。これらをふまえると、家庭において得られる居場所感とは、他者(友人)への信頼感や他者(友人)を受け容れようという気持ちにつながり、相互依存的に他者(友人)に甘えることを可能にするのではないかと考える。

以上のことをふまえて、本研究では、家庭における居場所感が思春期の子どもに与える影響について、自己肯定感との関係、「甘え」との関係に注目し、以下の仮説について検証する。

【仮説】

- ①自己肯定感が高い子どもは、家庭に居場所があると感じている。
- ②良好な人間関係を作りやすい「相互依存的甘え」が

高い子どもは、家庭に居場所があると感じている。
③良好な人間関係を阻害する傾向のある「屈折した甘え」が高い子どもは、家庭に居場所がないと感じている。

方 法

1. 調査時期と調査対象

2012年9～10月に福岡県内の中学1,2年生669名、高校1,2年生1027名の計1696名を対象に行った。そのうち、得られた回答数は、中学1年生317名（男子179名、女子138名）、中学2年生310名（男子174名、女子136名）、高校1年生388名（男子178名、女子210名）高校2年生597名（男子268名、女子328名、不明1名）、学年性別不明1名の計1613名であった。回答に不備のあった者を除き、最終的な分析に用いた人数は中学生445名、高校生855名であった。

2. 調査方法

各学校に質問紙（付録に掲載）を配布し、各学級にて担任教諭の教示のもと集団で試行するという方法をとった。プライバシーは保護されること、回答が難しい場合は回答しなくてもよいことを紙面上で教示した。

3. 調査内容

1) 基本情報：性別、学年

2) 家庭における居場所感に関する項目

則定(2008)によって作成された「青年版心理的居場所感尺度」4因子のうち、「本来感」、「被受容感」、「安心感」を測定する14項目を用いた（以下、心理的居場所感とする）。加えて、「家に帰るとほっとする」、「しんどい時は家に帰りたいと思う」、などの「いつでも帰れる感覚があるかどうか（以下、いつでも帰れる感覚）」を測定する9項目を「家に帰った時の感覚」、「外で家を思い浮かべた時の感覚」、「家族とのつながり」という3つの点から作成し使用した。（Table1）この計23項目について、「まったくそう思わない」を1点、「とてもそう思う」を5点とし、5件法で評定を求めた。

Table1 家庭における居場所感
(いつでも帰れる感覚)に関する項目

<家に帰った時の感覚>
・家に帰るとほっとする
・家は自分にとって休息の場である
・何かうまくいかない時に家に帰ると安心する
<外で家を思い浮かべた時の感覚>
・いざという時、家族は自分を助けてくれると思う
・しんどい時は、家に帰りたいと思う
・家族を思い浮かべると、頑張ろうと思う
<家族とのつながり>
・家族とのつながりは大切だと思う
・家族と離れていてもつながっていると感じる
・家族と話したい時、家族は話を聴いてくれる。

3) 自己肯定感に関する項目

平石(1990b)によって作成された、対自己領域の3因子（「自己受容」、「自己実現的態度」、「充実感」）と対他者領域の3因子（「自己閉鎖性・人間不信」、「自己表明・対人的積極性」、「被評価意識・対人緊張」）から構成される「自己肯定意識尺度」をそのまま使用した。全41項目について、当てはまらない（1点）、どちらかと言えば当てはまらない（2点）、どちらとも言えない（3点）、どちらかと言えば当てはまる（4点）、当てはまる（5点）の5件法で評定を求めた。

4) 友人に対する「甘え」に関する項目

玉瀬・相原(2004)によって作成された「多元的『甘え』尺度」に数ヶ所変更を加えて使用した。まず、一部の三人称（「誰か」、「身近な人」、「身内」、「周り」、「周りの人」、「親しい人」、「他人」）を、友だちに対する甘えを測定するため、「友だち」に変更して用いた。また、内容を中学生により身近なものにするため、「サークル活動」は「部活動」に変更した。さらに、より分かりやすく伝わりやすいものにするため、「友達」は「友だち」に変更し、「将来」という言葉には「（進路や職業など）」と説明を加えた。この尺度は「希求」、「受容」、「歪曲」、「拒絶」の4因子で構成されており、全20項目について、「まったく当てはまらない（1点）」、「あまり当てはまらない（2点）」、「少し当てはまる（3点）」、「とても当てはまる（4点）」の4件法で評定を求めた。

4. 分析手続き

自己肯定感〔総合、対自己領域（自己受容、自己実現的態度、充実感）、対他者領域（自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、被評価意識・対人緊張）〕、友人に対する「甘え」（相互依存的甘え、屈折した甘え）の合計得点をそれぞれ算出し、上位約25%をH群、下位約25%をL群、平均値を含む中間の約25%をM群とした。

結 果

1. 家庭における居場所感（いつでも帰れる感覚）に関する尺度

家庭における居場所感（いつでも帰れる感覚）に関する尺度9項目について主成分分析を行ったところ、固有値から2因子解が適当と思われたため、因子分析を行うことにした。

4種類の因子分析を行った結果、いずれも2因子で、同様の結果が得られたため、因子負荷量の値が最も高い、主因子法（プロマックス回転）の結果を採用した。その結果をTable2に示す。2因子による累積説明率は63.05%であった。

因子Ⅰに高い因子負荷量を示す項目は、(6) 家族と離れていてもつながっていると感じる、(4) いざという時、家族は自分を助けてくれると思う、(5) 家族とのつながりは大切だと思う、(9) 家族と話したい時、家族は話を聞いてくれる、(8) 家族を思い浮かべると、頑張ろうと思う、(7) 何かうまくいかない時に家に帰ると安心する、

Table 2 家庭における居場所感（いつでも帰れる感覚）に関する項目の因子パターン行列

	I	II	共通性
(6) 家族と離れていてもつながっていると感じる。	.87	-.07	.69
(4) いざという時、家族は自分を助けてくれると思う。	.83	.00	.67
(5) 家族とのつながりは大切だと思う。	.82	.00	.64
(9) 家族と話したい時、家族は話を聴いてくれる。	.74	.01	.56
(8) 家族を思い浮かべると、頑張ろうと思う。	.72	.04	.58
(7) 何かうまくいかない時に家に帰ると安心する。	.45	.36	.56
(2) しんどい時は家に帰りたと思う。	-.12	.86	.62
(3) 家は自分にとって休息の場である。	.03	.81	.68
(1) 家に帰るとほっとする。	.10	.75	.67
因子間相関	I II	.644	

であった。これらは、居場所を感じる要素として家族を重視している項目であると考えられるため、「家族への信頼感」と命名した。

因子IIに高い因子負荷量を示す項目は、(2) しんどい時は家に帰りたと思う、(3) 家は自分にとって休息の場である、(1) 家に帰るとほっとする、であった。これらは、家族というよりも、休息の場としての家を必要としており、「家に帰れば休める」という期待に関する項目であると考えられるため、「休息感」と命名した。

各因子の信頼性の値は、それぞれ $\alpha = .90$ 、 $\alpha = .84$ であり、9項目全体の信頼性は $\alpha = .91$ であった。

2. 家庭における居場所感と自己肯定感及び友人に対する「甘え」との関連について

中学生、高校生それぞれにおいて、自己肯定感及び友人に対する「甘え」の得点を独立変数として、家庭における居場所感得点（いつでも帰れる感覚、心理的居場所感）それぞれについて対応のない1要因分散分析を行った。有意な主効果がみられたものについては、多重比較を行った。その結果をTable3～Table6に示す。

Table 3 家庭における居場所感（いつでも帰れる感覚）と自己肯定感との1要因分散分析・多重比較（LSD法）の結果

居場所感	総合	I 家族への信頼感	II 休息感
自己肯定感	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>L* 高 H>L+
対自己領域	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M=L** 高 H=M>L**
自己受容	中 H>M>L** 高 H=M>L**	中 H>M>L** 高 H=M>L**	中 H=M>L** 高 H>L*
自己実現的態度	中 H>M>L** 高 H=M>L**	中 H>M>L** 高 H=M>L**	中 H>L* 高 ns
充実感	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M=L** 高 H>M=L**
対他者領域	中 H=M>L** 高 H=M>L**	中 H>M>L** 高 H=M>L**	中 ns 高 ns
自己閉鎖性※	中 H<M<L** 高 H=M<L**	中 H<M<L** 高 H=M<L**	中 H<L* 高 ns
自己表明	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>L+ 高 ns
対人緊張※	中 ns 高 ns	中 ns 高 ns	中 ns 高 ns

+ p<.10 * p<.05 ** p<.01
不等号は差が5%水準で有意であることを示す
※は逆転項目

結果をまとめると、自己肯定感及び友人に対する「甘え」の得点のH群、M群、L群における居場所感得点の関係が①H群>M群>L群、H群>L群になる場合、②H群=M群>L群になる場合、③H群>M群=L群になる場合の3タイプに分けることができた。

①の結果は、自己肯定感及び友人に対する「甘え」の程度が低いほど家庭における居場所感（低く、高いほど家庭における居場所感が高い。つまり、自己肯定感及び友人に対する「甘え」の高さに比例して家庭における居場所感も高まることを示している。②の結果は、自己肯定感及び友人に対する「甘え」が低い群における居場所感が他の2群に比べて低い。つまり、自己肯定感及び友人に対する「甘え」が低い場合は家庭における居場所感が低いことを示している。③の結果は、自己肯定感及び友人に対する「甘え」が高い群における居場所感が他の2群に比べて高い。自己肯定感及び友人に対する「甘え」が高い場合は家庭における居場所感が高いことを示している。

1) 自己肯定感と家庭における居場所感の関連について

「いつでも帰れる感覚」については、中学生でも高校生でも、自己肯定感のほぼすべての因子で群間に有意な差が見られた。いつでも帰れる感覚を因子別に見ると、家族への信頼感（自己肯定感のほぼすべての因子で群間に有意差が見られた。一方、休息感（自己肯定感の対自己領域では群間に有意差が見られたが、対他者領域では有意差はほとんど見られなかった。また、心理的居場所感については、中学生でも高校生でも本来感、被受容感、安心感のすべてに自己肯定感のほぼすべての因子で群間に有意差が見られた。

2) 友人に対する「甘え」と家庭における居場所感の関連について

「いつでも帰れる感覚」については中学生でも高校生でも、相互依存的な甘えの程度によって有意な差が見られた。一方、屈折した甘えの程度による有意差は中学生でのみ見られた。また、心理的居場所感についても、

Table 4 家庭における居場所感（心理的居場所感）と自己肯定感との1要因分散分析・多重比較（LSD法）の結果

居場所感	I 本来感	II 被受容感	III 安心感
自己肯定感	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**
対自己領域	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**
自己受容	中 H>M>L** 高 H=M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H=M>L**
自己実現的態度	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**
充実感	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**
対他者領域	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**
自己閉鎖性※	中 H<M<L** 高 H<M<L**	中 H<M<L** 高 H<M<L**	中 H<M<L** 高 H<M<L**
自己表明	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**	中 H>M>L** 高 H>M>L**
対人緊張※	中 H<L* 高 ns	中 H<M=L* 高 ns	中 ns 高 ns

+ p<.10 * p<.05 ** p<.01
不等号は差が5%水準で有意であることを示す
※は逆転項目

Table 5 家庭における居場所感（いつでも帰れる感覚）と甘えとの1要因分散分析・多重比較（LSD法）の結果

居場所感		総合	I 家族への信頼感	II 休息感
甘え	中高	H>M>L**	H>M>L**	H=M>L**
	中高	H>M>L**	H>M>L**	H=M>L**
屈折した甘え※	中高	H<M*	H<M=L*	ns
	中高	ns	ns	ns

+p<.10 *p<.05 **p<.01
不等号は差が5%水準で有意であることを示す
※は逆転項目

本来感、被受容感、安心感のすべてに相互依存的な甘えの程度による有意差が見られた。屈折した甘えの程度による有意差は、中学生の本来感と高校生の被受容感にのみ見られた。

考 察

1. 家庭における居場所感（いつでも帰れる感覚）について

これまでの居場所研究では、居場所で感じる感覚として本来感、被受容感、安心感、役割感など、居場所の中で感じるものが重視されている。しかし、心理的離乳にあたり家庭から離れることが多くなる思春期の子どもにとって、家庭の中で感じる居場所感だけでなく、家庭から離れている時でも家庭を自分の居場所として感じられることが重要であると考え、「いつでも帰れる感覚があるかどうか」についての尺度を作成した。作成時は、「家に帰った時の感覚」、「外で家を思い浮かべた時の感覚」、「家族とのつながり」という3つの点から考えたが、因子分析の結果、「いつでも帰れる感覚」は「家族への信頼感」因子と家庭での「休息感」因子の2因子から成り、家族はいつでも自分を助けてくれる、受け容れてくれるという家族への信頼感があることと、家がリラックスできる場所であり、家に帰れば休むことができるという期待を持てることが「いつでも帰れる感覚」の重要な要素であると考えられる。「家族への信頼感」は家族との情緒的なつながりを示すものであり、たとえば家庭から離れたとしても自分は家族の一員であり、一人じゃないという安心感をもち、子どもにとって心理的な支えとなるものである。また、「家族への信頼感」も「休息感」も、「家に帰りたい」という気持ちにつながるものであり、「いつでも帰れる感覚」は、家庭が思春期の子どもの心の拠り所となるかどうかに関わる重要な感覚であると考えられる。

2. 自己肯定感と家庭における居場所感の関連について

1) いつでも帰れる感覚

「いつでも帰れる感覚」と自己肯定感の関連について、中学生でも高校生でも自己肯定感が高いほど「いつでも帰れる感覚」は高くなったことから、「いつでも帰れる感覚」が高いほど自己肯定感が高まることが示唆され、「いつでも帰れる感覚」は、思春期の子どもの自己肯定感を高めると考えられる。

自己肯定感の領域別にみると、対自己領域でも同様

Table 6 家庭における居場所感（心理的居場所感）と甘えとの1要因分散分析・多重比較（LSD法）の結果

居場所感		I 本来感	II 被受容感	III 安心感
甘え	中高	H>M>L**	H>M>L**	H>M>L**
	中高	H>M>L**	H>M>L**	H>M>L**
屈折した甘え※	中高	H<M=L*	H<M=L+	ns
	中高	ns	H<L*	H<M+

+p<.10 *p<.05 **p<.01
不等号は差が5%水準で有意であることを示す
※は逆転項目

の結果が見られ、「いつでも帰れる感覚」が子どもの自己に対する肯定的な感情を高めることが示唆された。対自己領域の下位因子である自己受容、自己実現的態度については、中学生ではこれらが低い群ほど「いつでも帰れる感覚」が高くなり、高校生ではこれらが低い群の「いつでも帰れる感覚」はより低くなった。同じく対自己領域の下位因子である充実感については、中学生でも高校生でも、充実感が高い群ほど「いつでも帰れる感覚」も高くなった。これらの結果から、中学生の自己受容、自己実現的態度、充実感と高校生の充実感とは、「いつでも帰れる感覚」が高いほど高まること、高校生の自己受容と自己実現的態度は、「いつでも帰れる感覚」が感じられないと低くなることが示唆された。したがって、「いつでも帰れる感覚」は中学生の自己受容、自己実現的態度、充実感、高校生の充実感を高め、高校生が自己受容感や自己実現的態度を持つために必要であると考えられる。この中学生と高校生の違いは、中学生の方が高校生に比べて家族への依存度が高いことによるものであると考える。中学生にとって、自分についての悩みや不安を自分で解決することはまだ難しく、家族に肯定してもらえたり、助言してもらえたりすることで、自分の考えに自信を持ったり意欲的になれる。そのため、「いつでも帰れる感覚」が高く、いつでも家族に頼ることができる子どもほど自己受容や自己実現的態度が高まるのではないかと。それに対して高校生は、中学生に比べると家族から心理的に自立しているため、自己受容や自己実現的態度が家庭環境に大きく左右されることはないであろう。しかし、「いつでも帰れる感覚」は、高校生にとって心理的な支えであり、問題に対して自分で決定し、自分で解決するための基盤となるものであると考える。したがって、「いつでも帰れる感覚」が低い子どもは、心理的な支えがないため悩みや不安を自分で解決する力も低く、家族に頼ることもできないため、自己受容や自己実現的態度も低くなるのではないだろうか。

対他者領域では、中学生でも高校生でも対他者領域が低い群の「いつでも帰れる感覚」がより低くなったことから、「いつでも帰れる感覚」が感じられなければ対他者領域は低くなることが示唆され、「いつでも帰れる感覚」は、思春期の子どもの対人関係能力の基盤になると推察される。対他者領域の下位因子である自己閉鎖性、自己表明については、中学生では自己閉鎖性が高い群、自己表明が低い群ほど「いつでも帰れる感覚」は高まり、高校生では自己閉鎖性が低い群、自己表明

が高い群で「いつでも帰れる感覚」はより高くなった。これらの結果から、中学生では「いつでも帰れる感覚」が高いほど自己閉鎖性は低く、自己表明は高くなること、高校生では「いつでも帰れる感覚」を十分に感じられた場合、自己閉鎖性はより低く、自己表明はより高くなることが示唆された。したがって、「いつでも帰れる感覚」は中学生の他者に対する信頼性や積極性を高め、高校生の場合は「いつでも帰れる感覚」が十分に感じられた時、他者に対する信頼感や積極性もより高まると考えられる。

このように、「いつでも帰れる感覚」は自己肯定感の対自己領域、対他者領域にそれぞれ影響を与えよう。家族や家に対して「いつでも帰れる感覚」を感じられることで子どもにとって心の拠り所ができる。その結果、自分に対して肯定的な感情を持てるようになり、気持ちに余裕ができ、より他者を信頼し、積極的に他者と接することができるのではないだろうか。

次に、「いつでも帰れる感覚」を各因子別に見ると、「家族への信頼感」では総合とほぼ同様の結果が見られたことから、「いつでも帰れる感覚」による影響は、その第Ⅰ因子である「家族への信頼感」による影響が強いと考えられる。「家族との信頼感」によってもたらされる「一人じゃない」という安心感が、自分に対する肯定的な感情をもたらしと同時に、拒絶されることに怯えながら他者とつきあうのではなく、相手に自分を理解してもらおうとする意欲的な関わりを可能にするのではないだろうか。

一方、「休息感」については、中学生でも高校生でも自己肯定感が高い群ほど「休息感」が高くなったことから、「休息感」が高いほど自己肯定感も高まることが示唆され、「休息感」も自己肯定感を高める機能を持つと考えられる。

対自己領域については、中学生では対自己領域が高い群で「休息感」がより高く、高校生では対自己領域が低い群で「休息感」がより低くなったことから、中学生では「休息感」が高い場合、対自己領域がより高くなること、高校生では「休息感」が低い場合、対自己領域がより低くなることが示唆された。したがって、「休息感」を十分に感じている中学生は自己に対する肯定的な感情がより高まり、「休息感」を感じていない高校生は自己に対する肯定的な感情がより低くなると考えられる。

自己受容については、中学生では自己受容が低い群の「休息感」がより低くなり、高校生では自己受容が高い群ほど「休息感」が高くなった。これらの結果から、「休息感」が低い中学生は自己受容がより低くなること、高校生では「休息感」が高いほど自己受容も高まることが示唆された。したがって、「休息感」は中学生の自己受容を支え、高校生の自己受容を高めると考えられる。また、自己実現的態度については、中学生でのみ有意差が見られ、自己実現的態度が高い群ほど「休息感」が高くなったことから、中学生では「休息感」が高いほど自己実現的態度も高まることが示唆された。したがって、「休息感」は中学生の自己実現的

態度を高めると推察される。さらに、充実感については、中学生でも高校生でも充実感が高い群の「休息感」がより高くなったことから、「休息感」が十分に感じられた場合、充実感はさらに高まることが示唆された。

対他者領域では中学生、高校生ともに「休息感」による有意差は見られなかった。

家庭での「休息感」は、外界でしんどいと感じた時でも家に帰れば休めるという期待につながり、その期待が持てる子どもは、「今はもう少しがんばろう」とポジティブな考え方ができ、しんどい時間を乗り越えられる。その結果、自己肯定感も高くなるのではないだろうか。それに比べて家庭でもリラックスできない子どもは、休む当てもなくひたすら自分を追い込んでしまい、自己肯定感も低くなると考える。また、「休息感」が高校生の自己受容を高めること、中学生でのみ自己実現的態度や他者との接し方に「休息感」による影響が見られたことから、中学生と高校生で、家で「休息感」を感じる状況が異なることが推察される。中学生は家で家族といる時に「休息感」を感じ、高校生は家に帰り1人になった時に「休息感」を感じるのだとすれば、高校生にとって1人で自分について考える時間が自己受容を高めることにつながり、中学生にのみ見られた影響は家族によるものであると言える。

2) 心理的居場所感

心理的居場所感と自己肯定感の関係について、中学生でも高校生でも自己肯定感が高い群ほど家庭における「本来感」、「被受容感」、「安心感」も高くなったことから、「本来感」、「被受容感」、「安心感」が高くなるほど自己肯定感が高まることが示唆され、家庭で心理的居場所感を感じられることは、思春期の子どもの自己肯定感を高めると考えられる。

対自己領域でも同様の結果が見られ、心理的居場所感は自己に対する肯定的な感情を高めると言えよう。中学生の自己受容、自己実現的態度、充実感が高い群、高校生の自己実現的態度、充実感が高い群ほど「本来感」、「被受容感」、「安心感」が高くなったことから、「本来感」、「被受容感」、「安心感」が高いほど、中学生の自己受容、自己実現的態度、充実感、高校生の自己実現的態度、充実感が高まることが示唆された。家族からありのままの自分を受け容れられる経験によって得られる安心感が、中学生の自己受容感と、中高生の自己実現的態度、充実感を高めると考えられる。高校生の自己受容については、自己受容が低い群の「本来感」、「安心感」がより低くなり、自己受容の高い群ほど「被受容感」も高くなったことから、「本来感」、「安心感」が低い場合、自己受容がより低くなること、「被受容感」が高いほど自己受容も高まることが示唆され、家庭における「本来感」、「安心感」は高校生が自己受容感を持つために必要であり、「被受容感」は自己受容感を高める機能を持つと考えられる。

対他者領域については、中学生の対他者領域が高い群ほど「本来感」、「被受容感」は高くなり、対他者領域が低い群の「安心感」がより低くなったことから、「本

来感」、「被受容感」が高いほど対他者領域も高まること、「安心感」が低い場合、対他者領域がより低くなることが示唆され、中学生では家庭における「本来感」、「被受容感」が他者への信頼感や積極性を高め、家庭における「安心感」は対人関係の基盤となる感覚であると考えられる。高校生では、対他者領域が高い群で「本来感」、「被受容感」、「安心感」はより高くなったことから、「本来感」、「被受容感」、「安心感」が高い場合、対他者領域はより高くなることが示唆され、高校生にとって家庭における心理的居場所感を十分に感じられた場合、他者への信頼性や積極性がさらに高まると推察される。

下位因子について見てみると、中学生でも高校生でも自己閉鎖性が低い群ほど「本来感」「被受容感」「安心感」は高くなったことから、「本来感」、「被受容感」、「安心感」が高いほど自己閉鎖性は低くなることが示唆され、家庭における心理的居場所感は他者への信頼感を高めると考えられる。また、中学生では「本来感」、「被受容感」、「安心感」それぞれで自己表明との関連性が異なった。「本来感」は自己表明が低い群でより低く、「安心感」は自己表明が高い群でより高くなった。「被受容感」は自己表明が高い群ほど高くなった。それぞれの結果から、自己表明は、「本来感」が低い場合より低くなり、「安心感」が高い場合により高くなること、「被受容感」が高くなるほど自己表明も高くなることが示唆された。したがって、中学生が他者との関わりにより積極的になれるためにまずは家庭における「本来感」が必要であり、家庭における「被受容感」がより積極性を高め、そこでさらに家庭で「安心感」を感じられれば積極性はさらに高まると考えられる。一方高校生では自己表明が高い群で「本来感」、「被受容感」、「安心感」がより高くなったことから、「本来感」、「被受容感」、「安心感」が高い場合に自己表明はより高くなることが示唆され、家庭における心理的居場所感が十分に感じられた時、高校生の他者との関わりへの積極性はさらに高まると考えられる。さらに、「いつでも帰れる感覚」からの影響は見られなかった対人緊張について、中学生では対人緊張が低い群ほど「本来感」が高くなり、対人緊張が高い群で「被受容感」がより低かったことから、「本来感」が高いほど対人緊張は低くなること、「被受容感」が低い場合に対人緊張はより高くなることが示唆され、家庭における「本来感」は中学生の対人緊張を和らげる機能を持ち、家庭で「被受容感」が感じられなければ中学生の対人緊張はさらに高まる可能性が推察される。高校生では対人緊張が低い子どもの「被受容感」が最も高かったことから、「被受容感」が高い場合、対人緊張は低くなることが示唆され、高校生にとっても家族に受け容れられることが対人緊張を和らげる機能を持つと言えよう。しかし、対人緊張が高い群の「被受容感」が最も低くはならなかったことから、「被受容感」が低い場合に対人緊張は高くなるとは言えず、家族に受け容れられる経験が少ないことが対人緊張を高めるのではないと考えられる。

本研究での家庭における心理的居場所感は、すべて

家族という時に感じられるものである。これまでの結果から、思春期の子どもにとって、家族との関係の中で「ありのままの自分でいられる」、「受け容れてもらえる」、「安心する」といった心理的居場所感が感じられることが心理状態を安定させ、自己に対する肯定的な感情をもたらし、他者と関わることへの意欲を高めると考えられる。さらに、家族にありのままの自分を受け容れてもらえることで自己受容ができるようになった子どもは、ありのままの自分への自信を持つことができ、他者からの評価に対する不安や恐怖が和らぐと推察される。しかし、高校生では友人関係がさらに緊密になり友人からの評価をより気にするようになるため、家庭における被受容感の低さに関係なく、対人緊張は高まるのではないだろうか。

3) 中学生と高校生の違い

中学生では自己肯定感が高まると家庭における居場所感も高まるといった結果が多く見られたのに対して、高校生では自己肯定感が低い場合、家庭における居場所感がより低くなるという結果が多く見られた。このことから、中学生にとって家庭における居場所は自己肯定感を高める、あるいは低下させる要因となるが、高校生にとってはあくまで心理的な支えであり、自己肯定感を持つために必要とされるが高めたり低めたりする機能は低いと考える。

3. 友人に対する「甘え」と家庭における居場所感の関連について

1) いつでも帰れる感覚

「いつでも帰れる感覚」と友人に対する「甘え」との関連について、中学生でも高校生でも友人に対する相互依存的甘えが高い群ほど「いつでも帰れる感覚」が高くなったことから、「いつでも帰れる感覚」が高いほど相互依存的甘えが高まることが示唆され、「いつでも帰れる感覚」は友人に対する相互依存的甘えを高め、良好な友人関係の形成に役立つと推察される。因子別に見ると、中学生でも高校生でも相互依存的甘えが高い群ほど家族への信頼感が高くなったことから、家族への信頼感が高いほど友人に対する相互依存的甘えも高まることが示唆された。また、休息感も相互依存的甘えの低い群でより低かったことから、休息感が低い場合、相互依存的甘えはより低くなることが示唆された。これらの結果から、家族への信頼感、家庭での休息感どちらも良好な友人関係の形成の基盤となると言えよう。さらに、家族への信頼感、子どもの友人に対する相互依存的甘えを高め、良好な友人関係をより作りやすくすると考えられる。「甘え」は土居(2001)による定義から分かるように他者の自分に対する好意を信じることによって行える行為であるため、他者への信頼感が必要とされる。そこで、まずは自分にとって身近な他者である家族を信頼できることで家族に甘えることができるようになり、それによって得られた満足感が、友だちに素直に甘えたい、相手からの甘えにも応えたいという相互依存的甘えにつながると考え

る。

一方、屈折した甘えに関しては、中学生でのみ関連が見られ、友人に対する屈折した甘えが高い群の「いつでも帰れる感覚」がより低かったことから、「いつでも帰れる感覚」が低い場合、屈折した甘えがより高くなることが示唆され、「いつでも帰れる感覚」を感じられない子どもは友だちに対してもうまく甘えることができず、良好な友人関係の形成が難しくなることが推察される。また、屈折した甘えが低い群の「いつでも帰れる感覚」が最も高くはならなかったことから、「いつでも帰れる感覚」が高ければ屈折した甘えが低いとは言えず、「いつでも帰れる感覚」の高さに関係なく、中学生は屈折した甘えを少なからず感じていると考えられる。因子別に見ると、家族への信頼感は屈折した甘えが高い群でより低くなったことから、家族への信頼感が低い時、子どもの友人に対する屈折した甘えは高くなることが示唆された。このことから、家族への信頼感が感じられない子どもは、1人ではないという安心感を求めて友だちとの関係に異常に執着したり、友だちのことも信じられず拒絶を示したりして、上手く甘えられないのではないかと考えられる。

2) 心理的居場所感

家庭における心理的居場所感と友人に対する「甘え」との関連について、中学生でも高校生でも友人に対する相互依存的甘えが高いほど家庭における「本来感」、「被受容感」、「安心感」が高かったことから、家庭における「本来感」、「被受容感」、「安心感」が高いほど友人に対する相互依存的甘えも高まることが示唆され、家庭で心理的居場所感を感じられることが、友人に対する相互依存的甘えを高め、良好な友人関係の形成を可能にすると考えられる。家族によってありのままの自分を受け容れてもらう経験や家族と一緒にいることで感じられる安心感が子どもの心理状態を安定させ、自分は受け容れてもらえるという自信と同時に他者を受け容れるための余裕や受け容れる意欲をもたらした結果、友だちに対する相互依存的甘えは高まると考える。

一方、屈折した甘えに関しては、中学生では友人に対する屈折した甘えが高い群の「本来感」、「被受容感」が低かったことから、家庭における「本来感」「被受容感」が低い場合、友人に対する屈折した甘えがより高まると示唆された。これは、家庭において自分らしくいられない、ありのままの自分を受け容れてもらえないことに対する反動が友だちに向けられるためではないかと考える。また、高校生では友人に対する屈折した甘えが低い群ほど「被受容感」が高かったことから、「被受容感」が高いほど屈折した甘えは低くなることが示唆され、家族から受け容れられることによって、異常な執着や拒絶をすることなく友人と関わるができると言えよう。また、「安心感」は屈折した甘えの高い群が最も低かったが、屈折した甘えの低い群が最も高くはならなかった。つまり、「安心感」を感じられない子どもは友人に対して屈折した甘えを示しやすいが、

「安心感」が高ければ屈折した甘えを示さないというわけではないと考えられる。このことから、高校生の多くは、「安心感」の高さに関係なく友人に対してある程度の屈折した甘えを感じていると推察される。そこで家族という時に「安心感」が感じられなければ、家族に甘えることも難しく、友人に対する屈折した甘えがさらに加速するのではないだろうか。

3) 中学生と高校生の違い

家庭における居場所感と相互依存的甘えとの関連について、中学生と高校生の間に違いは見られず、家庭における居場所感が、中学生でも高校生でも相互依存的甘えを高め、良好な友人関係の形成を可能にすることが示唆された。

一方、屈折した甘えについては、中学生では「いつでも帰れる感覚」と「心理的居場所感」の両方からの影響が示されたのに対し、高校生では「心理的居場所感」からのみ影響が示された。このことから、高校生の友人関係が中学生に比べて家族関係から独立していることが示唆され、同時に友人関係が家族関係に代わるものに成り得る可能性を示唆しているとも言えよう。

4. まとめと今後の展望

調査の結果、自己肯定感や友人に対する「甘え」の程度によって家庭における居場所感得点に差が見られ、家庭における居場所感は、思春期の子どもの自己肯定感や友人に対する「甘え」に影響を与えることが示唆された。

家庭における居場所感は、家庭の中で感じられるだけでなく離れている時にも感じられ、子どもの心の拠り所となって自己肯定感や他者との関係の形成を支えると考えられる。つまり、家庭における居場所は、子どもにとって主要な居場所ではなくなったとしても帰りたい時に帰れる場所として必要とされる拠点と言えよう。たとえ友だちとの関係に危機が生じて、家庭に居場所があると感じられる限り子どもは1人ではない。家庭に居場所があるという安心感が、どんな自分も受け容れて前を向こうとする自己肯定感や他者より親密な関係を築こうとする意欲を高めるのではないだろうか。

本研究では、家庭における居場所感はすべての子どもに意識されるものとして調査を行ったが、主要な居場所が家庭から友人グループへと変化する中高生にとって家庭における居場所感が意識されにくくなる可能性は否定できない。中高生にとって、家庭における居場所感は友人関係に危機が生じ、居場所が必要とされた時に初めて意識されるものなのかもしれない。したがって、今後の課題として、友人関係の危機を経験したことがあるかどうかと、家庭における居場所感との関連を検討することで、思春期の子どもにとっての家庭における居場所の意義を明確にできると考える。また、家庭における居場所感と「甘え」との関係について、今回は友人に対する「甘え」との関連を検討し、家族に十分に甘えられることが友だちに対する甘えを

より好ましいものにしているのではないかと考えられたが、家庭における居場所感と家族に対する「甘え」との関連は明らかになっていない。したがって、家族、とくに親に対する甘えと家庭における居場所感との関連を検討する必要がある。

家庭における居場所感に関する研究がさらに発展し、家庭における居場所を思春期の子どもたちが感じる要因やその影響がより明確になることで、思春期の子どもたちやその家庭へのより効果的な支援につながると考える。

付記

本論文は、2012年度に福岡県立大学人間社会学部人間形成学科に提出した卒業論文を加筆修正したものである。

本論文の作成にあたり、アンケートに協力して下さった中学校、高校の生徒の皆様、アンケート実施の際にお力添えしていただいた飯田聖二先生、久津摩泰子先生、玉置康博先生、中島一生先生、山田大五郎先生、坂井道孝先生、井上八重子先生に、心より感謝申し上げます。

文献

- 青木省三(1996). 思春期ころのいる場所——精神科外来から見えるもの 岩波書店
- 栗谷初子・本間友巳(2009). 思春期の自己肯定感のあり方に影響を及ぼす要因について—学校生活適応感、生活習慣との関係を中心に— 京都教育大学教育実践研究紀要, 10, 193-202
- 土居健郎(2001). 続「甘え」の構造 弘文堂
- 平石賢二(1990a). 青年期における自己意識の構造——自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康 教育心理学研究, 38, 320-329
- 平石賢二(1990b). 青年期における自己意識の発達に関する研究(I)——自己肯定性次元と自己安定性次元の検討 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科, 37, 217-234
- 堀 洋道(監修)・山本真理子(編)(2001). 心理測定尺度集I—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉—サイエンス社 Pp.16-22
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文(2000). 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ—通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因—心理臨床学研究, 18, 221-232
- 中島喜代子(2003). 中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」三重大学教育学部研究紀要(人文・社会科学), 54, 125-136
- 中村泰子(1998a). 居場所イメージに関する検討—連想語の調査を通して— 日本心理学会第62回大会発表論文集, 138
- 中村泰子(1998b). 居場所イメージの発達の变化—○△□法の基礎的研究として— 大阪市立大学生活科学部児童・家族相談所紀要 15, 45-22, 1998

- 中村泰子(1999). 「居場所がある」と「居場所がない」との比較—○△□法の基礎的研究として—児童・家族相談所紀要 16, 13-22, 1999
- 則定百合子(2008). 青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文(未公刊)
- 佐治守夫・岡村達也・加藤美智子・八巻甲一(1995). 思春期の心理臨床 学校現場に学ぶ「居場所」つくり 日本評論社
- 坂本昇一(1993). 登校拒否のサインと心の居場所 小学館
- 杉本希映・庄司一子(2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究 54, 289-299
- 田中智雄(1992). 登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して—(学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会月報 5, 25-29 (杉本希映・庄司一子(2006)「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化より)
- 玉瀬耕治・相原和雄(2004). 大学生の「甘え」と特性5因子の関係 奈良教育大学教育実践総合センター紀要 13, 23-31
- 玉瀬耕治・相原和雄(2005). 相互依存的甘えと思いやり、屈折した甘えと自己愛的傾向 奈良教育大学紀要 54(1), 49-61
- 玉瀬耕治・今村友美(2006). 「甘え」と愛着(アタッチメント) 奈良教育大学教育実践総合センター紀要 15, 39-46
- 玉瀬耕治・岩室暖佳(2004). 関係性の維持と個の主張に関わる問題—「甘え」とアサーションを指標として— 奈良教育大学紀要 53(1), 37-45
- 玉瀬耕治・富平美智子(2007). 大学生の「甘え」と友人関係 帝塚山大学心理福祉学部紀要, 3, 59-72, 2007
- 玉瀬耕治・脇本真希子(2003). 大学生用「甘え」尺度の作成に関する研究 奈良教育大学紀要 52(1), 209-219
- 富永幹人・北山修(2001). 青年期の居場所: 青年期の精神発達の観点から— 住田正樹 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 平成10年度~平成12年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究成果報告書, 179-191 (則定百合子(2008). 「青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文(未公刊)」より)
- 富永幹人・北山修(2003). 青年期と「居場所」 住田正樹・南博文(編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 Pp.381-400
- 上野ひろ美(1992). 「居場所」(身体)と「関わり」(対話)—共同感情の組み換え— 現代教育科学 10, 28-30
- 瑞慶覧聡子・村田義幸(2009). 子供の居場所に関する研究—居場所と自己受容感との関係— 教育実践総合センター紀要 8, 33-42